



大人

猿楽小学校 五年一組 矢毛石徹

この本は、「ぼくら」シリーズの第一巻です。東中一年二組全員が力を合わせて作った、最高の七日間です。

ぼくは、この本を読むと爽快感を味わえます。なぜなら、自分たちは大人たちに不満を抱いています。が、「子どもだから」などの理由で不満をため続けていました。しかし、「ぼくら」が本の中で大人たちに言いたいことを言い、やっつけるので、たとえば本の中とはわかっていてもすつきりします。

ぼくが注目した登場人物は谷本聡です。谷本君はいつも、「エレキング」と呼ばれるほどのエレクトロニクスの天才です。谷本君がこの本の中であまりえがかれていませんが、影の立役者だとぼくは思います。例えば時限爆弾をかばんに仕掛けたり、不正な選挙活動を盗聴してFM放送で流したり、いろいろなことを行いました。もし谷本君がいなかったら、「ぼくら」のたくさんの計画のうち四つの計画は台無しなっていました。

最近子どもが自殺することが増えています。重大なニュースなのに

「またか」

と興味が薄れています。この本は「生きる楽しみ」をおしえ

てくれます。例えば、仲間がいれば不可能なことでも可能に出来るかもしれない。たとえ相手がだれだろうと勝ち目があるかもしれない。だからその自殺した人にこの本を読んでもらいたかったです。

「ぼくら」のやっていることに反社会的な行為は一つもありません。「ぼくら」は子どもからいう「悪い行為」を見逃さずに、悪を憎む正義感で大人たちをやっつけていると思います。ようするに、大人のいう「良い」「悪い」ではなく、子どもただ純粋な気持ちでやっているのです、大人たちは文句を言えません。ぼくは「ぼくら」の純粋な気持ちにとっても共感できます。

この本は子どもだけでなく大人に読んでもらいたいです。現実世界のぼくらが言いたいことを、本の中の「ぼくら」が代わりに言ってくれます。大人には特にこのセリフを読んでもらいたいです。

「われわれは、子どもを“いい子”にしようとしています。われわれのいう“いい子”とはなんでしょうか？ それは、おとなのミニチュアですよ。つまり、おとなになったとき、社会の一員として役に立つように仕込むのが教育なのです」このセリフを通じて、子どもは大人の囚人ではないということをおとなへ伝えたいです。